

Challenge to the Grade-I races

地方の名馬がやって来る!



厩舎から笠松競馬場まで、1*以上の道のりを馬は引かれて行く

全国公営でも一、二を争うハイレベル。中央遠征には便利な「地の利」もある。

これまで多くの名馬を輩出してきた東海・近畿・中国ブロック。その中でも、最近ではオグリキャップ、オグリローマンの兄妹を送り出し、今年もライデンリーダーを擁する笠松は、強い公営馬の宝庫として注目されるようになった。

笠松競馬場——名古屋から名鉄に乗り換え30分余り。牧歌的な雰囲気を漂わせる、典型的な地方の競馬場だ。

果たして、ここにどんな秘密が隠されているのだろうか。

「レベルが高い、といわれても現場の人間にとっちゃ、あまりピンとこないけど。いい種牡馬の仔は中央に行ってしまう。はつきり言って、こっちに来るのは、その次の次くらい。血統だけがすべてではないけれど、これは大きなハンデだよ。」

それでも活躍してくれる馬が出るってことは、環境がいいのかもしれないね。たとえば、笠松の場合、競馬場から厩舎までの距離が約1・5*くらい。この間、馬を連れて移動するわけさ。途中、車の走る道路を越えたり、もちろん、地元の人ともすれ違う。こうしたことを年中繰り返しているうちに、自然

と馬も神経が図太くなって、遅くなるんじゃないかい」

厩務員のひとりが寝巻を整理する手を休め、少し考えてから、解答らしきものを与えてくれた。そして、

「あとはテキ（調教師）に聞いてみなよ」と言い、再び寝巻の整理に取りかかった。

指示通り、同じ質問をライデンリーダーの荒川友司調教師にぶつけてみた。

「自分でいうのもなんだけど、努力してまよ。中央を別にすると、笠松の調教師が一番馬産地めぐりをしているんじゃないかな。暇さえあれば北海道に足を運んで、自分の目で見て、チェックしている。で、これはという馬がいたら、2歳の秋には持ってきて、馴致からやっていく。その積み重ねがレベルアップにつながると思う。」

それから地の利もあるね。京福、中京、阪神と中央への遠征もここなら楽でしょう」

環境と努力と地の利。これが中央を脅かすまでになった笠松のキーワードだ。

当然、今年から可能になった中央の、G1獲りにも意欲満々だ。全国を6つに分けた

ブロックの中で真っ先に名乗りを上げたのもライデンリーダーだった。

昨年の暮れ、9戦全勝を達成した時点で、桜花賞に挑戦することを宣言した。

笠松。桜花賞。この2つの言葉で思い出すのは、前述のオグリローマン。それと比較してもライデンリーダーは、まったくひけをとらない。

ローマンの3歳時の成績は7戦6勝、2着1回。一方のリーダーは紹介したように9戦9勝、9戦で2着馬につけた着差は実に34馬身。いずれも完勝である。



オグリローマンは中央移籍3戦目で桜花賞に優勝した



昨年の交流競走で活躍したトミノボルンガ（平安S3着、テレビ愛知オープン1着、オールカマー4着）



“オグリ兄妹”の出身地として知られ、“交流競走”の主役と地の名馬を輩出してきた。

岐阜県笠松競馬場と愛知県名古屋競馬場のある東海地区は、全国公営でも一、二を争う高いレベルにあると言われている。そこで今回は、オグリキャップ、オグリローマンの兄妹を始め、多くの交流競走の活躍馬や地の名馬を生み、3月19日の報知杯4歳牝馬特別に出走予定のライデンリーダーの出身地でもある笠松競馬場を訪ねてみた。



広見直樹=文
text by Naoki Hiromi

Challenge to the Grade-I races

地方の名馬がやって来る!



荒川友司調教師は「地方の名馬が中央のG Iに挑戦することで笠松を変えたい」と語る

地元にも所属した馬で中央のG Iに挑む。それによって笠松も変わっていく、とライデンリーダーの荒川友司調教師は言う。

「リーダーはもの凄く気性が悪い。いまは随分解消してきたけど、それでも油断していたらとこに飛んでいくかわからない。だから勝己もアプミを長くして乗っている。それを中央のお客さんが見て、田舎モンのスタイルだと笑わないかなって心配していたよ」
いすれにしても、強い公営馬の宝庫、笠松からライデンリーダーは、G I獲りの夢を乗せて、この日、旅立った。笠松に所属したまま、騎手も世話をする人間も変わらないまま、ワカオライデン。兄に皇月賞、ダービーを2着したワカテンザン、叔父にテンボイ

った。しかし、今度は安藤自身が手綱を取る事ができる。
「オグリキャップにしてもローマンにしても僕のお手馬でしたからね。悔しい思いはしましたよ。ただ、観ているほうが気楽であることは確か。嬉しい気持ちもあるけれど、ヘタなことではできないから、プレッシャーはありますよ」

「ライデンリーダーの厩務員、小野晃司も安藤に関して、次のようなことを言っていた。」

「本場に強い馬でした。こっちに来たときはツメが故障してたのですが、それでも一目で走る、と思いました」
笠松時代、ワカオライデンを担当していたのが、荒川調教師だった。
東海菊花賞、名古屋大賞典、サマーCなど重賞を総なめにして、現役を退いた。
「その子供も絶対に走る」と確信した荒川調教師は、初年度の産駒から積極的に自分のところで管理することにした。
現在、サブリーナチェリー、ライデンスキー、そして、ワカオライデンの妹に当たるワカオライカンなどが、荒川師のもとで大活躍をしている。
「子供たちの活躍で、ワカオライデンに対する自分の目が正しかったことが証明できて、ホント、嬉しいですね」
だからこそ、師のライデンリーダーへの思いは強く、深い。



サブリーナチェリー(父ワカオライデン)。フェブラリーSに登録もあり注目された東海の大物だが、脚部不安のため現在は休養中



2月20日のうぐいす特別に出走したライデンリーダーは5歳以上の「古馬」を相手に7馬身差の圧勝(右)。無傷の10連勝を記録し、3月19日の報知杯4歳牝馬特別に出走する

「ローマンと比べると、まだ、粗削りの面を残しているけれど、気性が成長すれば、勝負強さ、切れ味は上かもしれない」とは、リーダーの主戦騎手であり、ローマンの手綱も取っていた安藤勝巳の感想だ。
そして、2月20日、笠松競馬場でライデンリーダーの、社行会レース、が行われた。B2クラスによる「うぐいす特別」(ダート、16000m)。リーダーにとつては2カ月ぶりの実戦。しかも初の古馬相手。社行会とはいっても4歳の牝馬にとつては、かなり厳しい条件だ。
荒川調教師もレース前、
「中央の馬に負けるのならともかく、今日までは勝ってほしい。でも、競馬だから何がわかるかわからない。もし負けたら、取材を受け



「このあたりで負けるわけがない。勝って、堂々と中央に殴り込んでほしい」
馬券を買わずに観戦を決め込んだ中年のファンが呟いた。
レース後、荒川調教師はファンの前で胸の内を披露した。
「体調面はまだ7、8分の出来でした。これからもっと良くなるはずですが、今年から地方に所属したまま中央のG Iに挑戦することができるようになりましたが、これは笠松にとつても素晴らしいことで、競馬全体も変わっていくでしょう。もし桜花賞の権利が取れれば、精一杯頑張りますので、声援、よろしくお願いします」
集まった200人ほどの観客は、テレ奥そうに荒川師へ小さな拍手を送った。
それは中央のウイナズサークルでの声援を見慣れている者にとっては貧弱だったが、温かさは同じだった。
大役を果たした安藤騎手もさすがにホッとした表情を浮かべていた。
「とにかく、今日は負けるわけにはいかなかった。全勝でステップレースに臨みたかったからね。逃げたのは作戦じゃあないですよ。本当は中団につけて差す競馬をしたかった。でも、一枠だったし、スタートもよかったです。ああいう結果になっただけ。終始、馬なりだった? いや、そうじゃないですよ。ある程度は追いました。これを使って、馬もガリと変わってくれるでしょう」
オグリローマンは中央に移籍し、騎手も武豊に乗り替わった。オグリキャップもそうだ



荒川厩舎には元中央馬も多い。ワカオライデンの妹ワカオーカンは昨年の桜花賞戦線でも話題となった馬だ



ライデンスキー。こちらもワカオライデン産駒で、サブリーナチェリーとは「ライバル関係」にあったほどの実力馬だ

「リーダーの気性の悪いところは父親ゆずり、手がかかるけど、可愛い馬ですよ。それにしても、G I開放の最初の年にリーダーでチャレンジできるということは、僕にとつて意義あること。今回は駄目だったとしても、いずれはG Iを取ってみたい。それがワカオライデンの仔だったら、言うことないね」
笠松の、荒川師の、そしてワカオライデンの挑戦は始まったばかりだ。